

農業気象技術対策資料

## 台風6号の接近に伴う農作物対策資料

平成23年7月20日(水)

愛媛県農林水産部農業振興局農産園芸課

## 台風 6 号の事後対策資料

### 1 水 稲

#### ( 1 ) 浸・冠水水田の事後対策

ア早急に排水に努め、茎葉をできる限り早く水から出す。また、泥水等で汚れた茎葉は清水で洗い流す。

イ 浸・冠水した稲は、体内水分を失いやすいので、水田を急に乾かさない。

ウ 白葉枯病、いもち病等の発生が懸念されるため、適切な防除を行う。

#### ( 2 ) 今後の水管理

ア今年の水稲はこれまでの高温で根の活力が低下しており、水を溜めっぱなしにすると根腐れが発生するので、間断灌水や浅水管理をする。また、水の豊富な地域ではかけ流し灌水を行う。

イ早期水稲では最も水の必要な出穂～開花期なので、決して水を切らさないようにする。

ウ湿田や排水不良田では、溝切りや裏溝上げを行い、灌・排水が容易にできる状態にしておく。

#### ( 3 ) 塩水の流入水田や潮風を受けた水稲

ア塩水が流入した水田では、真水の灌水を繰り返し、塩分濃度を可能な限り低下させる。( 塩分濃度は 0.5% 以下が望ましい )

イ塩水流入水田では窒素肥料の効きが悪いので、生育に応じて硫安などのアンモニア態肥料を窒素成分で 10a 当り 1~1.5kg を 7~10 日おきに数回施用すると有効である。

ウ潮風で塩水がかかった水稲は、なるべく早く動力噴霧機等を使って真水で稲体の塩分を洗い流す。

### 2 大 豆

#### ( 1 ) 冠水、長時間湛水圃場

ア湛水時間をなるべく短くするため、圃場から速やかに排水する。

イ中耕・培土を徹底して生育を助長する。

ウ速効性肥料を追肥して生育の回復を図る。

エ播種が遅く出芽時に湿害が発生した圃場( 子葉が早い段階から黄色に変色 )では、今後の生育が著しく劣るため播き直したほうがよい。その場合、圃場の準備ができたならばなるべく早く再播種を行う。また、莢数の減少による収量低下を補うため密植栽培を行う。

#### ( 2 ) 倒伏大豆の対策

ア倒伏した大豆は、茎葉及び莢が地面につかないように株を引き起こし支柱やひもなどで支える。

#### ( 3 ) 病虫害防除

ア ハスモンヨトウやカメムシ類および紫斑病等の被害を受けると台風被害を助長して減収や品質低下が大きくなるので適切な防除に努める。

### 3 野菜

#### (1) 事後対策

ア 被害の軽微な場合

##### (ア) 病害虫防除

疫病、炭疽病、軟腐病等水媒性の病害が多発する恐れがあるので、汚れた茎葉の洗浄と損傷した茎葉の処理をし、薬剤散布を的確に行う。

##### (イ) 中耕と土寄せ

強い雨や風で土壤の通気性が悪くなったり、株元がぐらつき、生育が阻害される。このため、あまり根を切らない程度の中耕を行い、株元に土寄せして、株元を固定する。

##### (ウ) 施肥

根の活性が低下して、肥料の吸収が悪くなるため、尿素(0.3%~1%)等の葉面散布を行う。

##### (エ) 灌水

台風通過後は葉面からの蒸散が激しく、水分不足となりやすいので必要に応じて灌水をする。

##### (オ) 摘果

果菜類では摘果を行い果実負担軽減して根や草勢の回復を促す。

##### (カ) 補植・再播種

生育初期の圃場で、折損や流亡のため欠株が生じている場合は、予備苗(余り苗)を速やかに再定植又は再播種する。

イ 被害の甚大な場合

##### (ア) 早く収穫する

海水の流入や潮風などで茎葉が枯死した野菜のうち、収穫期に達している野菜は、多少未熟でも商品価値の落ちない内に収穫する。

##### (イ) 代替野菜の作付け

被害が著しい場合には、残渣を速やかに除去し、他の品種又は作物に転換することも検討する。

##### (ウ) 施設

倒壊した施設は、速やかに建て替える。さらに破損等の点検に努め、必要に応じ早急に資材の確保と補修・補強を行う。

## 4 果 樹

### (1) かんきつ類

#### ア 強風害対策

##### (ア)被害樹の枝処理

倒伏した若木や幼木は、土壌が乾燥しないうちに起こして、支柱を立て結束する。根元が回された樹は、できるだけ早く覆土し、支柱を立てる。

枝折れが発生した場合は、その基部から切除し、トップジンMペーストを塗布する。軽い股裂けは、ひもで結束して癒合を促す。

##### イ 落葉程度に応じた摘果

(ア)落葉の程度に応じて、見直し摘果を行う。落葉の激しい樹は、着果を制限して、樹勢回復を図る。

##### ウ 日焼け防止

(ウ)落葉 50%以上の被害の甚しい樹では、日焼け防止のため、石灰乳等を塗布する。

#### エ 病虫害防除

(ア)台風の強風雨によりかいよう病の多発が心配され、また降雨量が多くなることで黒点病の発生が助長されるので、適切な防除により被害の拡大を防ぐ。

かいよう病は一旦発生が多くなると、数年は被害が続き完全に抑えることは困難となる。最近の新品種は総じてかいよう病に弱い。また罹病した夏秋梢は次年度以降の重要な発生源となる。このため、ICボルドー66D200倍、コサイドボルドー2000倍(炭酸カルシウム剤200倍加用)散布するとともに、発病果・葉などは徹底的に除去する。

また本年は梅雨からの雨量も多いため、引き続き黒点病の発生が懸念される。前回防除から積算降水量が200~250mmを超えていれば防除を実施する。薬剤はジマンダイセン600倍などを散布する。

(イ)台風通過後にカメムシ類が発生することがあるので、園内の飛来状況に注意する。

#### オ 潮風害の特長

潮風を受けた木は、被塩後3日目頃より葉が黄白色に変色し落葉する。落葉は6~8日頃がピークで20日間くらい続く。

(ア)枝の枯死は、被害直後と翌春の発芽期頃に発生する。幼樹では第1次の枯死が多く、大樹では第2次の枯死が多い。第2次の枯死現象は、根の枯死によるものである。

(イ)被害甚大樹の果実の商品価値はなく、落下した果実と同様となる・被害中・軽度の果実も肥大が抑制され糖度も低く、大部分の果実は傷果となり着色も不良で品質不良果が多い。

(ウ)翌春の新梢の生育が不良になる反面、被害樹においても葉の多い枝には着花が多く、落葉した枝に着花がみられない。

#### カ 潮風害応急対策

落葉程度別に被害軽度(落葉率30%以下の局部被害)の場合は、今年産果実の品質向

上と樹勢回復に努める。被害中庸(落葉率 30~70%)樹の場合は、果実よりも樹勢回復と被害の進展防止に努める。被害甚大(落葉率 70%以上)樹では、木の枯死回避に努めるが、ひどい場合は改植を考える。

#### (ア)除塩

塩害の可能性がある場合は早急に、スプリンクラー、動噴、スピードスプレーヤによる除塩を行う。

また、海水が流入した園ではできるだけ早く大量の水で洗い流す。石灰資材を混和するとナトリウムをカルシウムで置換することで、塩分が降水、灌水によって溶脱される。硫酸カルシウムを 10a 当たり 100kg 程度施用して、除塩に努める。

#### (イ)摘果

傷果を中心に摘果を行うが、着果量の少ない樹での早期摘果は大玉果や夏秋梢の発生による品質低下につながるため、仕上げ摘果で調整する。

塩害等で落葉した樹では、果実による養分消費を少なくするために、落葉程度に応じて摘果する。被害甚大樹および中庸樹の落葉した枝は、全摘果する。被害中庸樹の一部落葉した枝と被害軽度の樹では、大玉、小土及び主枝、亜主枝先端部の果実を摘果し、葉果比を温州ミカンで 30~50、伊予柑では 120~150 とする。なお、若木や樹勢の弱い樹では、被害中庸樹でも全摘果する。

#### (ウ)せん定

落葉した樹では、残った葉による光合成量を確保するために、無せん定とする。枯れ枝が発生した場合は、そのせん除はできるだけ遅らせる。

### キ 秋肥の施用

(ア)落葉 70%以上の樹では施肥を中止し、50~70%の樹では基準量の 1/3 施用、30~50%では 1/2 施用、30%以下では基準どおりとする。

秋芽が発生すれば、発生 10 日目頃に窒素主体の液肥を数回、葉面散布する。

## (2) ハウスミカン

ア ビニールが破損したハウスについては、採収後数日おいてから選別を行い出荷する。

## (3) キウイフルーツ

### ア 病虫害防除の徹底

台風による多雨によって、果実軟腐病が発生する恐れがある。トップジンM水和剤 1000 倍、ベンレート水和剤 2000 倍、ベルコート水和剤 1000 倍等による防除を徹底するとともに、定期防除は必ず実施する。また、台風通過後にカメムシ類が多発することがあるので、圃場での発生に注意する。

### イ 落葉した果実への日焼け防止

強風等によって早期落葉し、果実の表面温度 40 以上が長時間続くと、空洞果や日焼け果の発生を助長するので、傘掛けや寒冷紗等による被覆を行う。

### ウ 摘果

落葉の甚だしい樹については、樹勢回復と品質向上、翌年の着花促進のため、風傷果、奇形果、小玉果、病虫害被害果等を早めに摘果する。

#### エ 落葉後再発生した新梢の摘芯

落葉の甚だしかった樹では新梢が発生してくるが、その新梢は充実を図るため、弱い新梢で4~5枚、強めの新梢で7~8枚をおいて軽い摘芯を行うとともに、液肥の葉面散布を行う。

#### オ 施肥

落葉の甚だしい園では施用量をやや控える。

#### カ 灌水

土壌水分が不足すると、樹体維持のために最終的には果実中の水分を奪うこととなる。このため、残った葉および果実の萎凋をよく観察し、必要に応じて灌水を行う。

### (4) くり

#### ア 損傷枝の処理

大きな枝や幹が折れた場合は、その下まで切り戻して、トップジン M ペーストなどを切り口に塗り癒合促進を図る。

#### イ 倒伏樹の処理

幼木は早めに起こして株元に土をかけ、支柱を立てる。

### (5) なし

#### ア 落下果実の処理

商品価値のない果実は、土中に埋める。

#### イ 病虫害防除

台風通過後に、カメムシ類が発生することがあるので、園内の飛来状況に注意する。

### (6) かき

#### ア 摘果

落葉した園地では、残葉数に応じた結果数となるよう風ずれ果などを摘果する。

#### イ 病虫害防除

台風による多雨により炭疽病が発生しやすいので、ベンレート水和剤 2000 倍、オンリーワンフロアブル 2000 倍などを散布するとともに、定期防除は必ず実施する。

また、発病果や夏秋梢は重要な発生源となるので、必ず園外に持ち出す。

また台風通過後に、カメムシ類が発生することがあるので、園内の飛来状況に注意する。

## 5 花き類

### (1) 事後対策

#### ア 施設破損等の対策

(ア)台風通過後は早急に施設を見回り、破損か所などを補修する。また、倒壊した施設は速やかに建て替え、修復可能な施設は補修する。

(イ)防風のために使用していた被覆物(コモや寒冷紗等)は早急に除去する。

#### イ 大雨後の対策

(ア)大雨で圃場に水が停滞している所では、早急に排水対策を行う。根の活性を低下させないために、畝間の停滞水を速やかに圃場外に排水する。

回復の見込みがない場合は、早急に被害株を抜き取り植え替えする。

(イ)根の活性が低下し養分吸収が悪くなるので、液肥 1,000 倍液の葉面散布を行い、生育の促進を図る。

降水量が多い場合には肥料の流亡も大きいので、速効性の窒素肥料(1kg/a)を施用し草勢の回復を図る。

(ウ)降雨による土砂の跳ね上がりで病害の発生も懸念されるため、ジマンダイセン水和剤、マンネブダイセンM水和剤の 600 倍等で防除を兼ねて土砂を洗い流す。

冠水、浸水後に疫病が発生した場合は、薬剤を灌注する。なお、病害予防のため、登録農薬で薬剤散布を徹底する。

#### ウ 風の対策

(ア)台風通過後、倒伏した花き類は早急に起こして支柱やネットを立て直す。さらに、根の浮きあがったものは、茎葉を立て直し土寄せする。また、茎の折れたものは、切り返して再整枝する。

(イ)茎葉の損傷が甚しく回復の見込みがない場合は、早急に被害株を抜き取り再作付けの準備をする。

(ウ)台風通過後は、茎葉の損傷により病害虫が発生しやすいので、損傷した茎葉や花を取り除き、登録農薬で 4~5 目おきに 2~3 回、定期的に薬剤散布を実施する。

## 6 畜産

### (1) 飼料作物

冠水や浸水等の被害を受けたほ場においては、速やかな排水に努めること。

### (2) 家畜

ア 天候が回復した後、直ちに畜産施設内及びその周辺の排水を行うこと。また、土砂が流入した場合には、再度の土砂流入等の事故に十分注意しつつ、土砂を除去すること。

イ 家畜伝染病予防法(昭和 26 年法律第 166 号)に基づく飼養衛生管理基準に沿った衛生管理を徹底すること。特に冠水や風雨に流入等といった畜舎内環境が大きな影響を受けた場合には、消毒を徹底するとともに、個体観察を強化し、異常が認められた場合には速やかに獣医師に相談すること。

ウ 養分の低下した飼料作物や品質の低下した濃厚飼料の給与をする場合にあっては、栄養価、嗜好性等にも配慮し、家畜の生産性が低下することのないよう注意すること。

